

鎌田：あの、まず空援隊の事業、全般のところから伺いたんですけど、遺骨収集の数がですね、空援隊が始められる前は40体位、40柱だったのが、去年は7,700あまり、大幅に増加しているわけですね。

倉田：そうですね。

鎌田：増えている要因っていうのはどういうことですか？

倉田：はい。一番にですね、我々が考えてるのは要するに旧軍の資料を無視するところから話が始まってます。要するにフィリピン戦線っていうのはどこまで行ってもですね、最終的には軍事行動、戦闘によって亡くなった方ではないっていう方が大半を占めているんです。要するに、餓死、病死。それからあとは、フィリピン側、当時はフィリピン軍ではないんですけども、フィリピン側に掃討された、要するに日本軍が最終的にゲリラになってしまった。でフィリピン人の生活を脅かすようになって、彼らから掃討されて行くんですよ。ですから軍に残る記録としては残ってないんです。だから戦闘行動、部隊行動をやっている間は残ってたんですが、最終的に、ご存知だと思いますけど制空権も制海権も無くなってしまって、各島間の行き来もままならない、という状況の中でほとんど軍の統制がとれてないんですね。ルソン島北部に関しては最終最後まで頑張った。まあ、キアンガンで山下大将が降伏してますんで。当然そこは最後まで軍事行動を取っていたっていうことはあるんですが、他の地域ではほとんど軍隊の体をなしていない、っていう中で当然山の中にばらばらに入っていくわけです。私が最初に入ったのが5年前。それまでフィリピン行ったこと無いです。5年前の例のミンダナオ事件なんですけど、あの事件の時に間に入って、悪いことしてた日本人がいるっていうその人の取材に入って。その人があいつら生きてたってどうせ脱走兵じゃないか、脱走兵探すより本当に一所懸命頑張ってる兵隊さんのご遺骨がこんなにごろごろしてるんだからそれを何とかしないのはおかしいって言いだして。全然恥ずかしながら知らなかったです。実態を。で、おかしいなあと思って取材に入ったんです。取材に入って行ってみたら、まああ

るわるわ、いたるところでごろごろしてるわけです。おかしい、なんでこんなにいっぱいごろごろしてるのに政府の派遣団とか収集してないのかなと思って当時のセブの領事館、それから大使館、それから日本に帰ってきて厚労省、日本遺族会、戦友会とかいるらなどこ訪ね歩いて聞いたんです。これなんとかならないの？そしたらですね、どこもなんかみなさん反応が鈍いというか、厚生労働省とか大使館とかあるいは日本人会とかですね、に至っては、ほとんどそんなものは信じられないとかですね、信じられないっていったって俺らは現場行って見て裏取ってきてますけどっていっても、信じられない、って言うんですよ。そりゃどうしたらええんやろと。で厚生労働省の記者クラブとか投げ込んでいったりとか、いろいろしたんですけど、各社全く反応しなかったです。これじゃあしょうがないと。この事件、私にとっては事件なんです。65年間ほったらかして来た日本の国って、いったいどうなのかって。それをなんとかしたかった、っていうのがほんとの発端なんです。で、はじめたんですけど。それやっていく中であまりに酷い現状、その中でまず日本の戦史を、最初は当然たたくわけですよ。全部たどってみたんですけど、たどってみると無いんです。つまり部隊がここで集結しました、ここで降伏しましたっていうところは行ってみても無いわけです。あれ？おかしいな、それがまずひとつの大きな疑問。そのあと調べていくうちにこれ戦史で探しちゃだめなんだっていうことに気づいて。もうこりゃジャーナリズムの世界のけないとしょうがないと思って。NPO作って。顧問の先生方、当然長いこと取材活動してましたから、国会議員さんといっぱい当然お友達もいますから、彼らに協力してもらって顧問団にずらっと現職の議員さん名前連ねてもらったらですね、いきなり厚労省が「とりあえず行きましょう」という風にかわって。じゃ行ってください。で、行ったら当然あるわけですよ。その時は触ることを許させていませんから、俺らは、一生懸命場所を探しては厚労省そこへ行く、ということばかりやってたんですけど。

鎌田：そうするとこれまで全く何も厚労省なり、やってなかったから急に数が増えたということに？

倉田：要するにね、始まった当初、昭和26年の閣議決定によって日本の遺骨収集って始まるんですけども、それをベースに法律が無いままで、旧軍の残務整理として全てそれを厚労省が引き受けて・・・ですね。で、当初は当然戦友の方とか現地を知ってらっしゃる方、フィリピンの国情もそう大きくかわってない、ただ山の中ゲリラばかりで、身動きがとれない、危険だっていうような中で彼らは十分やっておられたんだと思うんですね。それは非常に危険でもあり、また道も悪い、凄大変やっつろうと思います。でもそこで集められたのは所謂その旧軍の戦史に基づく収集です。でも我々はそれ追っかけてって65年間たったら地形も変わってる、人も変わってる。しかも遺骨収集国家の事業として何十年やり続けて来たわけですからそんなとこに逆に言えばあるわけがない。あつたらおかしいです。まあありますけど、時々。慰霊碑ばかりあちこち立ってます。じゃあ全然別の視点で探さなきゃいけないな。でフィリピンの国情探りを始めて最終的に行き当たったのはトレジャーハンターとゲリラです。トレジャーハンターっていうのはね、日本人にちょっと馴染みにくいっていうか

鎌田：あの山下氏のあの財宝ね。

倉田：山下ゴールドを探す人たちです。フィリピンの人達の8割、9割は信じてますからね、今だに。だから仕事がなければ山に入るわけですよ。彼らが探してる目当ては山下ゴールドなんですけど、山下ゴールド探すためには何探すのかって、遺骨さがすんですね。遺骨のあるところにあるんじゃないかって。だから洞くつなんか入って行って遺骨は興味がないからどけちゃう、で、そこ周辺を掘り返す、っていうことをやってるわけですね。その彼らから「見つかったらその財宝を貴方達にあげるから、財宝は私いらぬから、その骨の情報だけくれ」というバーターをするようになるわけです。トレジャーハンターにもある種組織化されてる部分がありまして、そのリーダーとかと知り合って話をするようになって、彼らのネットワークを広げていって、それが今フィリピン全土に広がってます。今、月給で常時雇用してるのが11人。テンポラリーでフィリピン側のスタッフで働いてるのが約300人。毎日彼らが山の中入

ってるわけです。ですから情報収集の量の違いです。それがその戦後ずっと少なくなってきて今何十体しかあがらなかったのが、いきなり何千、今年では多分、今年度は万超えると思いますけど。集まるようになってきた主原因だと思えます。

鎌田：あのまあ大幅に増加するわけなんですけど、これから何うのはその中にそのフィリピン人ですね遺骨がまじっているのではないか、という疑惑、勿論今そういった疑惑がもちあがっているのはご存知だと思うんですけど。

倉田：はい。

鎌田：そもそも遺骨がですね、日本兵かどうかっていうのはその根拠ですね、これはどういう風にチェックされているんですか？

倉田：基本的に我々は全てフィリピンの国内法に基づいて、フィリピン国内で活動してますので、フィリピン国内法に基づいてまずアフィダビッド、宣誓供述書ですね。

鎌田：宣誓供述書。

倉田：宣誓供述書に基づくというのが形の上では一番最初に出てきます。その前の時点でうちの現地スタッフ、もしくはテンポラリーのスタッフがダブル、もしくはトリプルクロスチェックをかけてるんですね。でそこで第一発見者の言、それから一番多いのが第一発見者はトレジャーハンターもしくはゲリラなんですけど、その情報をもとにその地域へうちのスタッフが行って、その地域の古老にお話を伺って。この辺に日本兵が来たことがあるか、ある、どこらへんですか、あの山、あの山のあの辺の洞くつ、ぐらいのことは子供のころでも覚えてます。で、彼らの話を聞いてそれと合致するかどうか。まずこれが第一ポイントです。こればOKになったらうちから収集の指令を出してます。それで取ってくる時に宣誓供述書でもし自分がこれが日本兵のものでない、要するに嘘をついたら裁判に持っていかれて自分が逮捕されますよ、という宣誓供述書なんで

す。そういうものを基本的に了解してもらった上でその宣誓供述書とともに遺骨を受け取る。その時に遺留品があれば一緒に出してください。ただ遺留品で彼らは非常に貧しいんで遺留品自体はその場で写真を撮ってお返しするというのが基本です。

鎌田：まずその、供述書、宣誓供述書に基づいてその前段階でチェックはかけてる。そういうことなんです。あの実はあのフィリピンの各地ですら遺骨の盗難騒ぎが起きています。

倉田：はい。

鎌田：で、その盗難された遺骨というのは当然日本兵ではなくフィリピン人の遺骨ということですね。その骨が盗難騒ぎが各地で起きていて、その骨がですね空援隊の

倉田：うちが盗んだってことになってるんでしょう。

鎌田：まあ空援隊が盗んだかどうかは別として、空援隊の収集事業の中に混じているとか、そういう疑惑が今…

倉田：それについてははっきり言っておきますけど、その可能性に関しては、盗んだものに関しては全く無いと言えますね。

鎌田：無い。

倉田：はい。

鎌田：無いという根拠は、

倉田：盗んだと言われる地域からまずうちが収集してません。それは全部言われるようになって再点検をさしたんです。一箇所もありませんでした。ですから盗んだ地域からうちが収集してないのに、盗んだものを持って帰ってるっていう可能性はゼロです。ただ現場で出てきたものの中に一片二片混じってる可能性はありますよ。

鎌田：要するに日本兵以外のフィリピン人の骨が混じってる可能性はある。

倉田：可能性は否定できません。それは分からないですから。

鎌田：分からない。

倉田：分からないです。全く。

鎌田：かなりそれも混じってたりしてるんじゃないですか。

倉田：それも無いですね。やっぱりその出してくる人たちっていうのはですね、フィリピンというのは土葬の国ですから、基本的にあちらこちらに遺骨っていうのはあるわけですね。その墓あばいていけば。その墓あばくっていう行為が、逆にほんじゃ彼らは貧乏人だから金やりゃいくらでもするんじゃないかっていう方向へ考えられがちなようなんですけど、それをもしやっただとして、それが見つかったらどうなるのか、ぐらいはいくらフィリピンの人でも考えます。ましてや我々は一応日本の政府の委託を受けて事業をします。当然その許可書も持っているわけですし。それ持っているのはフィリピンではうちだけなんです。それを当然フィリピンの国立博物館、これ大統領府の直轄ですから、あそこが認定して、そこからの許可証をもらい、その地域へ入っていくわけです。ですからその許可証を持たずに入っていくっていうことは基本的にありえないですよ。それ見せてやって、そこへ偽物のアフィダビッドと一緒に持って来たらどうなるかぐらいはいくら何でも考えますから。

内山：倉田さん今チェックとおっしゃいましたけど、つまり盗まれている地域の。そのチェックの手法は何をもってチェックするんですか？

倉田：え？

内山：つまり盗まれてる地域の。それはアフィダビッドで書いてるものでチェックしてるんですか？

倉田：勿論。それ以外を根拠に我々動いてないです。

鎌田：あのミンドロ島っていうところありますね。

倉田：はい。

鎌田：あの、ここで遺骨盗難した業者が逮捕される。

倉田：はい。3人捕まったやつね。はい。

鎌田：この人たちの証言、取材してきたんですけど、空援隊に骨を渡す地元の仲介業者に

倉田：仲介業者？

内山：仲介してる人。

鎌田：仲介してる人ですね。日本兵の遺骨一袋で6,500ペソ払うというふうに言われたんだ、つまり

倉田：その仲介してる人？っていうのは誰なんですか？

内山：つまり空援隊のスタッフ。つまりIDカードを持った協力者。で、ま、彼はミンドロの中に居てですね、自分は骨集めの責任者の一人だと言ってる。で、まそれで当然各村々に彼が骨集めをしていてパーミットがちゃんと出ている事を認識した上で、あの協力する間に入っている人ですね、仲介して、真ん中に入っている人。

倉田：ああ。

内山：その元にその人たちから地元のまたコミュニティに日本兵の

骨を集めると言って全く三段階、四段階になるんですよ。一番下で集める人たちがいらっしやる。そういう人たちがとにかく持って来たら勿論日本兵の遺骨ということですけど

倉田：勿論。

内山：まあその上で一袋いくらっていうかたちの話になっているので

倉田：それは無いですね。

鎌田：無いっていうか、空援隊がそういうことをやらせてるということ言ってるのではなくて、

倉田：はい。

鎌田：盗難、遺骨を盗難した人間が逮捕されて、その逮捕された人間の動機というのが空援隊が骨を集めてるから、ということなんです。つまり結果的にそういう犯罪が起きてるかたちになってしまっているということ。これどうですか。

倉田：それはあり得るかもしれませんね。実際問題として。現実今申し上げますけど、末端まで行くとうち直接管轄してる人間だけで約300人いるわけです。それは組織形態になっているわけですけど、各地の全てのスタッフの顔や名前知ってるかっていうとそこまで把握してないですから、彼らがどういう風に解釈をしてその下に伝えてって、果たして把握しきれてるかっていうと、そりゃあやしいでしょうね。

鎌田：でもそうなるときき倉田さんは盗難した骨は絶対入ってないって仰ったけども、末端までたどっていくとですね、盗難という犯罪行為が行なわれて逮捕されている人間は何でそんなことやったかっていうと動機はこうだっていうのがあるわけですから、盗難した骨が混じってないとは言えないんじゃないですかね。

倉田：まあそういう考え方もあるでしょうね。ただそれをですね、現実どうなるかっていうと、仮に盗んだ人っていうのが当然上にコンタクトパーソン居るわけですね、そのコンタクトパーソンに持ち込みますよね。持ち込んだ時点でうちの連中っていうのがかなり遺骨に詳しいんですね。だからコンタクトやってるんですけど。だから盗んできた骨であるのか、その辺から取ってきたものであるのか、あるいは洞くつに転がっていたものであるのか、ぐらいの見分けはつくんです。そこでまずはじきます。受け取らないです。でその上にさらにもうちょっと各地域に当然担当みたいなのいますから、いつらが次のチェックをします。この時点で例えば真新しい髪の毛が混じってるとかですね、服着るとか、そんなの当然振り分けられるんです。どんどん。必然的に日本兵であるっていう証明をみんな出さしてます。

鎌田：さきほど仰った宣誓供述書。

倉田：その、なんていうんですか、許可証をコピーして使ったりとかすることもあるのかも知れないです。それはあっちこっちから聞いてますから。だから、それがどういう経緯で流れていったのかは分かりませんが。でも、まあ、逆に言って、そういう人は捕まえてもらわないとしょうがないですね。だから、それ以外にね、我々今一番懸念してるのは、それ我々以外のね、日本人グループとか、これ不思議なんです、韓国人のグループが遺骨集めて回ってるんです。その事例にあっちこっちで当たるんですね。それが不思議でね。何をしてんのかなと。

内山：それはほとんど経済的合理性も何もないですよ。

倉田：そうなんです。経済合理性なんて言い出したら、私等もないんですよ。

内山：いや、もちろん、ただ原資はね、当然・・・

倉田：そう。とりあえず、何で出てくんのかもわからない。さっぱり。

内山：ほとんどあれですよ、あの

倉田：それに関しては、全然別ルートで変な話に来てるんで、そっちを追っかけてますから、それでまあ、表に出てくると思いますけど。

内山：倉田さん、今、遺骨に詳しいと仰いましたけど、コンタクトパーソンとかそういう人たちは。

倉田：ああ、はいはい。

内山：どういう例えば教育をされてるとか、あるいは申し伝えてるとか。どういうことで詳しいと認定をされてるんですか。

倉田：教育？教育？

内山：うん、つまり、何を根拠に詳しいとおっしゃてるのか。

倉田：ああ、一緒に現場を歩いた人間で、こういう所で見分けるんだよというようなことは、やった奴にしかうちのコンタクトにしないんです。

鎌田：ど、どういうことをやられてるんでしょうか。

倉田：ああ、まず、どこにあるのか。遺留品と一緒に出てきたか。で、どういう証言を元を取ってきたのか。というのをちゃんと確認した上で、で、その骨自体が上がってきたら、土の形状、それから子供の骨とか女性の骨とか見分け方。まあ、その程度のことは最低限はやってるはずなんで。

鎌田：あの、空援隊にもそういう専門的な、まあ、になっている方

がいらっしゃる。

倉田：はい。

鎌田：で、弾くことができるという風に、

倉田：はい。

鎌田：仰いましたけども、あの、これ私共が取材した現地の人なんですけど、去年の11月ですね。イフガオ州ウハというところで遺骨を持ちこんだ男性の話なんですけど、

倉田：ウハに遺骨持ち込んだ人ね。

内山：ウハですね。場所。

鎌田：ええ。あの日本兵とフィリピン人の遺骨が混じってる、日本人とフィリピン人の骨が大量にある場所があるそうなんですよ。

倉田：ああ、ありますね。

鎌田：ええ。そこに行って、おじいちゃんから場所聞いたらね、そこに行って大量に集めて来たよ。

倉田：うん。

鎌田：自分で集めてきて、それを空援隊の方に渡したと。で、渡した、渡す時に、日本人の骨かフィリピン人の骨か、両方混じってますと、混じってるはずで空援隊のスタッフの人に伝えたら、もう場所はどこだとか、あるいはどういう形態だったとか、何も聞かずに

倉田：ただ受け取ったと？

鎌田：ただカウントして、カウントし始めて、これはもうすべて日本人の骨だという風に言ったと。というようなことが起きてるようなんです。つまり・・・

倉田：それね、11月のウハっていうのはカウントしてる時は、あの、これもちよっと多分誤解があるような気がしますが、カウントとか鑑定してるのは我々じゃないんです、最終。で、鑑定ということは元々やってません。

鎌田：鑑定しないんですか？

倉田：しないです。宣誓供述書を元に、それを受け取ってるんです。だから、それまでに出来るだけ、おかしいのは省こうと、日本兵らしいのだけ持って行こうと。

鎌田：それで、その、かん、鑑定、け、供述書を書く前段だと思うんですけど。

倉田：いや、前段とかじゃじゃなく、持って来た時に、供述書なければ受け取らないです。

内山：だから、具体的にお話すると、

倉田：はい。

内山：村長を通じて普段は（遺骨を）出してるよ。

倉田：はい。

内山：村長に持って行くと、これは、相当、まあ、××的な、なんてるんですが、村長のところへ持って行くと、中間を取られちゃうと、マージンを。なので、直接持って行った方がいいという話が皆に広がって、ウハのときは、その人たちを含めて、3回も焼いて、焼骨式でね。お名前は、まあ、あれすると、サントスですよ。

あの地域で名前が通ってますから、直接持って行ったと。

倉田：サントスに、はい。

内山：うん。そしたら、まあ、サントスが数えた訳じゃないけど、そのまま隣の人が数え始めて、で、後は、村長からお金もらうからってことになって、で、その場ではお金もらわなかったんだけど、サントスが数だけカウントしたんだよ、幾つって形になってですわ。

倉田：カウントしてるのは、その時は、基本的には博物館員ですよ。

内山：いや、多分その時に、焼骨式の準備をもうしてた。で、下から上に運んでいる時だったと。

倉田：うん、だから、どんな時であっても、カウントしてるのはすべて博物館員ですよ。

内山：でも、それは受け取って、もう博物館に渡しているってことですよ。

倉田：当然宣誓供述書もくっついてってことですよ。

内山：宣誓供述書は後日出してます。

倉田：それは、おかしい。

内山：そういうことが起きてるんですよ。

倉田：それは有り得ないです。

鎌田：どうも、その、倉田さんの認識と実際に現地で起きていることがギャップが生じてきているんじゃないかなっていう気もするんですよ。

倉田：うーん、まあ、それないとは言え切れないでしょうけど、すべてって訳じゃないから。

鎌田：それともう一つ、すべての根拠というのが宣誓供述書ということ

倉田：はい。

鎌田：これももちろん大事なことだと思うんですけども、これアバタン村のケースですけれども。

倉田：アバタン村、はい。

鎌田：村長が代わりに書いていると。

倉田：ああ、アフィダビットを。

鎌田：ええ。

倉田：ああ、はいはい。

鎌田：で、住民が持ってくるという、そういう村長の所へ持って行くと。で、村長はじゃあ、そこで何をしているかと言うと、どういう場所かとかも何も聞かずに、とにかくすべて自分は、仮に、書いて、断れない。つ、つまり、日本人の骨なのか。

倉田：断れないって言うのは、村長が断れない？

鎌田：そう。村長が持ってきた骨がフィリピン人の骨なのか、あるいは日本人の骨なのか、必ず日本人の骨だって言って持ってくるから、これどう見ても違うようなものが仮にあったとしても、断ることが出来ないと。どうしてかって言うと、断るとお金がもらえなくなるから。こういうことが今起きてるんですよ。供述、宣誓供述書

ってというのは、極めて今杜撰なものになっていると。

倉田：ふーん。

鎌田：うん。

倉田：杜撰なものになってる？いや、別に杜撰なものに・・・

鎌田：場所も書かないし。

倉田：場所も書いてます。

内山：書いてるけど確認をしてないんですよ。

鎌田：確認をしてない。

内山：つまり、こういうことで、

倉田：その現場に行っていないってことですか。

内山：つまり、その村長が、まず確認したいのは、代理で書くということは、基本的に認めていらっしゃるってことですか。

倉田：はい。字書けない人がいっぱいいますから。

内山：そうそうそう。でも、必ずしもそうじゃないですよ。英語も非常に流暢に書ける人も話せる人も村長の代わりに書いたりしてって言う人もいっぱいいて。

倉田：それは多分その地域の事情でしょうから、そこは我々は関知してません、逆に。

鎌田：いやいや、それをどう書いてるんですかっていうことに関しては、一個一個は、もう確認に行っていないし、つまり提供した側で

すね、骨を持って行った人に、自分これをどこで取った、どういう状況から出て来た、どういう出土状況だったかっていうことは一切村長には伝えていない。で、村長は聞いてないけど、書いてるんです。つまり、アフィダビットっていうのは、

倉田：聞いてないけど書いてる？

内山：つまり、まあ、アバウトには聞いているんでしょうね。郡までとか、そういうことは聞いているんでしょうけども、ただ正確な場所を一切聞いていない。それはすぐ倉庫において保管されている。

倉田：正確な場所を聞いてない？

内山：どこの洞穴から、どういう状況で出てきたかっていうことが、確認してなくて書いてるってことです。今言ったのは、その際に、それがどういうものなのかを証言の信ぴょう性については確認の仕様がなし。村の人たちが何日もかけて取って来る。それに対して、いちいち探偵じゃないんだから、正確に、どこだっていうことは言えないと。どういう状況で書かれてるって

倉田：基本的にフィリピン人の言っていることを信用するかしないかの違いだと思いますからね、それは、基本的に彼らを信用しないと我々の活動成り立ちませんから。まあ、そんなこともあるんでしょうね。

内山：信用とか以前にですね、一人一人の命がかかっているんですよ、もちろん戦没者です、返すために。実態を確認されているんですか。

倉田：実態の確認？ どういうことですか。

内山：つまり、宣誓供述書がそういう状況で書かれてるってこととかね、起こるかも知れませんが、そういうことじゃなくて、そういう確認はされてるんでしょうか。

倉田：現地には確認するように指示は出してますし、私が行っている限りにおいてはしてます。

鎌田：それが、それが実態上は、そうじゃない形になってきている。

倉田：そういうこともあるかも知れないですよ。そういう話があるんなら。それは調べ直さないといけないでしょうね、こちらも。

鎌田：つまり、こう、唯一の根拠というのがですね、宣誓供述書ということであれば、そこは人の命に関わることだと思いますので、数が増える、もちろん遺骨が返ってくるっていうのは、本当に良いことだと思いますよ、日本兵の人たちに。ただその中に、つまり、あまりに数にですね、

倉田：数全然こだわってません。

鎌田：つまり、な、何が起きているかって言うと、数にこだわらないんだけど、私は、あの、一番根本的なことは、今やってらっしゃる事業の中で、労賃を払ってらっしゃるという形になってますよね。

倉田：はい。

鎌田：で、もちろんご存じだと思いますけれども、貧しい国ですから、当然そのお金を払うってことになればですね、それは数の多い方が良いと、一体について、何ペソという形に、今もうなってる訳ですから。そうすると、その、その為ですね、その、日本人ではない遺骨あるいは盗難騒ぎも間違いなく起きている訳です。で、そのきっかけというのは、空援隊が今やってらっしゃる事業がきっかけになっている。これはお認めになりますよね。

倉田：そうですね。

鎌田：そこでお金を払うって形を採るとですね、つまり、宣誓供述

書も結果的に杜撰なものになってるし、色んなものが混じっている可能性が起きている。そういうことがあるんじゃないですか、仕組みとして。

倉田：仕組みとしてどうかと言われれば、そこはね完璧なものじゃないと思いますよ、私も。完璧なものではありえないと思いますし、あの国で完璧を求めるのは無理やと思ってますから。だからまず何処まで行ってもその何ていうんですかね、その、フィリピンの国情っていうのが、日本の常識とあまりに違うっていう現実。その中で、たとえば一体我々は何が出来るのか、っていう最良の方法を探すしかないわけですよ。これよく言われるんですけどね、フィリピン人の骨混じってたらどうすんの？ってことは。だからそれは混じらないように精いっぱいやってますよ。一部それが混じる可能性っていうのは、それは絶対否定できないです。ただその1体混じることを恐れて99体返せないと言う事の方を我々は恐れますと。

鎌田：本当に1体なのか、もっと大量に混じっているんじゃないかという気が私どもはするわけですよ。

倉田：それは絶対無いと言い切れますね。

鎌田：いや、そういう感じを持つ訳です。つまり、99対1ということじゃないんじゃないか。もちろん私ども何体という根拠があるわけじゃありませんけれども、どうも大分杜撰に、どんどん来て来ているんじゃないかという心配があります。で、さっき仰った本当にチェックがやられているのかどうかという所についても、あの疑問を持たざるを得ない。

倉田：チェックに関していうとね、宣誓供述書を元に持ってきたものを最終的にカウントするのは国立博物館員なんですよ。

鎌田：カウント。鑑定っていうやつですね。

倉田：鑑定じゃない、カウントです。

鎌田：カウント。

倉田：鑑定は一切してませんから、彼らは。

鎌田：鑑定ということについても、お話ししようと思ったんですけども。

倉田：はいはい。

鎌田：いいですか、これで進めて。

内山：今の前の質問に戻るんですけど、1対99だと、1体混じることによってね、残りのものを持って来れないっていうのはね、非常に違和感を感じるんですけども、それを言い切るためには、最大限ですね、つまりこう、これだけやってて漏れたりしたら、それは仕方が無いって誰もがそうだと納得することだけ尽くしてれば、当然それは、そうかもしれないと、ご苦労されてるところをね、重箱の隅をつつくようなことになるのかも知れないと思いますけども、今見えてきている現状は、そんなこと言える立場じゃないと思うんですよ。つまり、先程、仰られてたのは、300人自分たちに協力してくれている。その人たち一人一人を知らない。

倉田：私はね。

内山：私はですよ。

倉田：私は全員を知る訳じゃないです。

内山：全員知らないのに、一体も、そんなもの混じってる可能性がないって言ってしまう訳ですよ。つまり、現状しっかり把握されてないで、今こちらで答弁されてるんですよ。つまり、300人が誰であるかも知らず、中には知らない人もいます。

倉田：います。

内山：人柄も知らない訳ですよ。どういう教育を受けているのかも知らない。そんな中で、自分たちのやっていることは、一体も怪しいものが入ってないと

倉田：一体も怪しいものが入ってないなんて言っていないです。

内山：最初に言われましたよね。

倉田：それは盗掘してきたようなものを受け取っているからって言ったら、それはないと言ってるんです。

鎌田：ないとは断言できないんじゃないんですか。

倉田：いや、それはね、現場を把握してるしてないっていうのもひっくるめて、我々としては、それを絶対ないようにするために、やってきたことですから。

鎌田：絶対ないようにするためにやってきたことが、やはり不十分なんじゃないですか。

倉田：まあ、不十分と言われれば、まあ確かに、そういう部分はあるのかも知れません。

内山：ただ、そしたら、

倉田：不十分であって、それは改善していかなくやしようがないですよ。

内山：その状況の中でね、多少混じってしまってもしょうがないんじゃないかっていうのは、あまりに・・・

倉田：あまりに何ですか

内山：あまりに、自分たち本位ですよ。

倉田：自分たち本位っていうのがよく分からないんですけど、我々にね、決してノルマがある訳じゃないですし、で、空援隊に関わってる人っていうのはフィリピン人以外、誰一人給料すら貰ってません。そんな中で活動してて、無理やり数出さなきゃいけない理由は我々にはないんです、実際問題、どんな理由すらない。それは全員わかってることなんですけど。その中で、じゃあ、我々がわざわざ杜撰にしなきゃいけないのかという理由も当然ない訳です。まあ、それが結果として、そういう風になっていってるという可能性があるというご指摘に関しては、それはこちらとしては真摯に受け止めて、直すべきは直さないといけないんだろうとは思いますが。ただそれが、大半フィリピン人の骨だっというような主張とは、与しないと思うんですね、我々としては。

鎌田：大半がフィリピン人の骨かどうかっていうことは、ちょっとわれわれも分からないんですけども。

倉田：はい。

鎌田：ただ、100体の内、99対1という感じではないんじゃないかということは、私ども、実感としてはあることと、それともう一つなんですけども、今軽々に遺骨に混じるとかですね、そういう言い方をしてしまいましたけれども、これフィリピンの人の立場からするとですね、それはつまり、フィリピンの人の死に対して、それは極めて失礼なことではないかという気がするんですよ。つまり、仮に盗掘されたものがそのまま焼かれて日本に持って行かれるということになるとですね、あるいは盗掘じゃなくても混じってるものが日本に行くっていうことになると、フィリピンの遺族の人たちいますよね、その感覚が欠落してるのではないかと、ちょっと足りないのではないかとこの気がするんですよ。

倉田：そうですね。確かに、フィリピンの人たちに対する配慮で

いうのは、そういう面からみれば、かなり低いかも知れません。ただ、それをね、気にしてしまうと、もう遺骨収集はできないんです。

鎌田：できない？

倉田：はい、実際問題として。だから、今仮に、我々が、じゃあ、こうやってNHKさんにも叱られるし、もう止めましようと言って止めたら、来年からフィリピンからは遺骨帰って来ないんです。まだ30何万残ってるんですけど。で、それは、色んな理屈が残ってるんでしょし、残したい人たちもいるみたいですから、別にそれでね、我々が知らなくて言えば、済む話だとは思ってます。でも、まあ、委託事業を受けてやっている以上、我々としてもできる限り、それこそ本当に、あの、フィリピンの人たちにも誠実に、やっていきたいと思っていますし、それを全然変える気はないんですけどね。

鎌田：変える気はない？

倉田：はい。

NHKカメラマン：すいません、テープ変えます。

鎌田：あの、チェックのやり方をですね、例えばもう少し強化するとかですね。倉田さん、まさに仰ったように、何も何千も何万もなあってほしいという、つまり、これだけ戦後65年以上経ってる訳ですから、日本国内の遺族の方もですね、できれば無縁ということではなくて、肉親に帰ってほしいという風に皆さん思ってる訳ですから。

倉田：当然そうです。

鎌田：無縁の、つまり、千鳥ヶ淵に行く遺体の数はもちろん増えた方がいいと思いますけれども、それはその数十であったものが、数千になってほしいとか数万になってほしいとか、多分、おそらく誰も思わないと思うんですよ。

倉田：そういう人もいます。

鎌田：ああ、そうですね。

倉田：はい。でも、我々としては、全量回収が基本だと思ってます。

鎌田：まあまあ、そういうことですね、最終的にはね。

倉田：ただフィリピンに、個体識別がほとんど不可能ですから、遺族に御遺骨をお返しできるチャンスは、ほとんどないんですね。そしたら、まあ、今、厚労省とも一部協議をして始めてるんですけども、きれいに一体だけで、こう出てくる時ってあるんですよ、やっぱり、一体分。その時だけは、せめて頭蓋骨だけでも残して、その歯だけを持って帰って、DNA鑑定に回そうと。ただ、そのDNA献体も相手方がいけませんので、DNAによる鑑定っていっても、実際問題できない訳ですね。で、そうすると、他の方法論はどこにあるのかというと、御遺骨自体の出た状況、御遺骨の状況を見て、これは日本人、これはフィリピン人という判別が誰にもできないんです。できるって言うてる人たちが何人かいるんですけど、どうもおかしくて。あの、私も当然、これをやり出す前に、大学の教授にもやったんですけど、そこは厚労省にも聞き、他にも聞き、で、日本で遺骨鑑定ができる人はいないのかという確認に行ったんですね。そうしたら、現場で、これをフィリピン人、これを日本人と判別できる人っていうのは、世界中に誰もいないという結論だったんです。ああ、そうなんだと、じゃあ、それはもうしょうがないなと。で、もう1件確認に行って、やっぱり同じセリフでした。で、フィリピン人に、ちょうどその当時来てた鑑定人ダタールさんですよ。ダタールさんは、それをやれる、できるって言う訳ですね。で、できるって言って、彼がやった遺骨を逆に年代測定に回したんですよ。そしたら、1600年前の骨やったりする訳ですね。もうこれは話にならないと。だから、これじゃあ、もう全く現地に遺骨ってやつが出てきて、これが誰の骨なのかっていう判別が全くできないんじゃないかなと、科学的には、それを何せ集まったものを全部持つ

て帰って全部DNAにかけてそれを日本人、フィリピン人ってやるんならそれは可能性はないのかもしれないですけど65年前以上のご遺骨なんでDNAできない部位の方が多いですね、圧倒的に。そしたらその時に他にどんな方法があるのか、っていう中で今作り上げていった方法論っていうのは、その方法論でしかなかったんですね。

内山：倉田さんいま集められた二つちょっと・・・やり方はですね、これはそう、これはそうじゃないんです。そこは多分コミュニケーションのギャップがあるんでしょうけども。これはそうって言えるものだけを持ち出すっていうスタイルですよ。

倉田：そうですね。

内山：それだからアカデミズム的には当たり前なことなんですよ。65年もたって正確にいえない以上は。

倉田：その彼が日本人の骨ですと明確に言ったものが1、600年前の骨っていう判断をされたんですよ。

内山：その鑑定書と・・・DNA鑑定は日本人かフィリピン人か判らないのでたとえDNA鑑定かけても日本人かフィリピン人かなんていうのは判らない、倉田さんは今その程度のご理解しかなかったのっていうと、つまり最大限やれることとは思えないんですね。

倉田：DNA鑑定にかかる費用は誰が出すんですか。

内山：だからかけても判らないんですよ。日本人か。

倉田：判らないですよ。

内山：だから費用の無駄じゃないんですか。

倉田：だから判るのは相手が検体出してきて、それでの話ですか

ら、それ以外DNA鑑定だって判らないですよ。

内山：そうでしょ。だから無理なんですよ。

倉田：だから無理なものを、じゃどうやって持って帰るんですか？  
って、持って帰る方法ないじゃないですか。

内山：そしたら最大限これは確からしいっていうものしか持って帰れないというのは、普通にいった考え方ですよ。それを尽くされてますか？って質問です。

倉田：だからそのために方式を作ってそれが・・・っていう方式なんですよ。

鎌田：でその方式が

倉田：それが杜撰になってきている

鎌田：そう

倉田：だからもう点検しなおして厳重にそれがきちっと出来上がるように現場に指示してやり直して行くしかないですよ。

内山：僕らあたりは意図的に杜撰にしているとしか思えない。たとえば他の国を考えたならこんなに杜撰なことで持って帰ってくるころはひとつもないですよ。たとえばどこから出たって地図つけてますか？とそこから出てきたか？って正確な地図つけてますか？あとからトレースできるってできますか？

倉田：出来ますよ。

内山：出来ませんよ。

倉田：なんで出来ないんですか？

内山：だってどこでとったか知らない人たちがいっぱいいるんですよ。

倉田：それ・・・たらどうですか。

内山：それも含めて

倉田：だからそこから持ってきた人間を特定してそこへたどることは出来ます。

内山：その方が亡くなったらどうするんですか。記録ってそういう問題じゃないですか。その人が生きてる時しかトレースできないじゃないですか。

倉田：当然そうですね。

内山：つまり不十分なんですよ。あらゆることが。

倉田：不十分は認めます。十分不十分たと思ってます。

内山：だとしたら

倉田：これ以上方法がない以上現在は方法ないです。

内山：だからそのときにそれ以上方法がある場合には

倉田：勿論そうですね。

内山：これ以上あること、できることがあるのにやってないってことは数を増やそうがするためにやっているとしか思えないってことです。

倉田：それは全然違いますね。数増やすためにやるって理由は

ないんですね。

内山：ほんとそうなんです。だからわかんないんです。何のためにこんな杜撰なやり方でやってるんだろう

倉田：杜撰なやり方とかじゃないんです。残ってる量が膨大すぎるんです。

鎌田：冒頭のところで戦史はそもそも信用ならんというふうにおっしゃいましたが、そこはただ倉田さんの思いとか、あるいは実態はねそういうことがあるっていうことかもしれないけど、少なくとも戦史に基づくというのは多くの国民が多分そういう形でここで何人位が亡くなって、あるいは何人位が亡くなって、っていうのは概ねこの国が認めてることですから、一般に人は多分それに信憑性を感じと思うんですね。

倉田：そうですね。おそらく。

鎌田：ですよ。先ほど数字が全然違う、実は数字にもひとつ拘ってるところがあるんですけど、さっき言いましたミンドロ島では去年1,366柱送還してるんですね。厚労省の資料ですと438なんですね。3倍ぐらい違うんですね。海ですから、あまりにね戦史が信用できないって仰るのかもしれない、あまりに公の数と実際見つけた数が違いすぎるという印象しかないんですよ。つまり杜撰なんじゃないか、っていう風に思わざるを得ない。

倉田：そういう部分だけを見れば多分そういう印象を持たれることもしかたないと思うんです。現実問題そのアフィダビット見てみるとミンドロの中で、こないだ出てきたやつですけども日本兵が海から大量に上がって来たと。それが近くの洞つに籠ってみなさん亡くなったと。ていうようなのも普通に出てくるんですよ。そんなもん日本の戦史にどこにも載ってないですよ。そういうのもある以上一体何を信用してやったらいいのかっていうのは我々としては過去の歴史っていうものの持つてる事実、518、000フィリピン

で亡くなりました、軍人軍属含めて。これは信用しないと仕方がないわけですよね。これ100万人って言うてもしょうがない、518、000人なんでしょう。それも推測です。518、000人の中で今まで日本に遺骨収集でお帰りになったっていうのが約14万人。だとすれば残りはいくらなんですか、その残りをベースにしてやっていますからこれは全く戦史を無視してやってるわけじゃない。しかも国が遺骨収集事業っていうものを無視するものでも何でもありません。ただこれからやっていくのに、65年経って情報はないし、実際に集められない状況が生まれ、そんな中でたまたまそこに行きあった。行きあたって、これどうすんの？わたし戦没者回りに身内に全く居ませんので、戦没者の遺族でも何でもありません。単なる一人の人間としてこれってほっといていいの？聞かれたわけですが、一番最初に行ったときにフィリピン人に。なんでこんなほっとくの？いやほどあちこちで。日本からODAもらって空港造ったり道路造ったり、っていうのはすごいありがたいと思うよ。でもうちの裏山にごろごろ遺骨ほっとくのは何とかしないと。日本でもっともとお金持ちの国でしょ。その時にわたしは返す言葉をもってなかった。それが自分自身の気がして。なんでこんな状況になってんのか、わからない。だから調べ始めた。

鎌田：それのお気持ちはねよくわかるんですよ。このままにしておけないだろう。で、始められて遺骨収集事業は極めて結果出したかたちになってるんですけども。これ申し訳ないんだけどお金がここに絡むということ、つまり倉田さんたちが儲かるとかそういうことではないんですよ。つまりフィリピンの人たちにお金を渡すということ、つまりこういう風になる、つまり盗難騒ぎにもなると、ということ。倉田さんもフィリピンの人たちの国情ご存知だと仰ったから、やっぱり想定されるべきじゃないですか。そういうことが起きてきてるわけです。

倉田：まあ確かにそういう現実があるんでしょう。ただそこで我々が今困ってるのは我々以外の人たちも、同じようにやってるのか、どうやってるのかわかんないんですけどそういう人たちがいるわけですよ。

鎌田：そりゃちょっとわかりませんがね。

倉田：彼らがやっていると全て盗難の話も出てくるんです。

内山：イコールまたあれですけど空援隊のいるところでも起きてるんです。まわりの団体だとうって話じゃなくて、じゃあこのこと一個教えてください。ミンドロっていう島、戦没者の推定438です、そこから1,366返してる。今年も集まると言っていました、担当者が。この数字の乖離って何ですか。なぜこれだけの数なんですか。

倉田：なぜそこで。最初に言っているとおり私は基本的にフィリピンの戦史を無視して集めてますから、出てきたものをアフィダビットに応じてそれを厚労省に届けてるだけで、それ持ってかえらないか、持って帰るかは厚労省次第です。私ら自分で持って帰るもの無いです。我々今持って帰ることを許してもらってないです。我々は今委託事業としてやるのは情報収集をし、それをアフィダビットを基に集め、で厚労省の職員に渡してるんです。

内山：整理して考えるとこういうことですか。非常に国に持って帰りたい、遺骨を返さなければいけないとか、熱い思いの集団が空援隊で、目の前にある骨が日本人のものだと言われたらそれは何の選別もせずに

倉田：何の選別もせずにといったら違うと思います。

内山：そうじゃなかったら倉田さん・・・ですよ。

倉田：どうしてですか。

内山：どうしてって逆に聞きたいんですけど。つまりこの数が出るはずない数なんですよ。最低限その位の調査をしてないってことですよ。

倉田：その数ぐらいは知ってますよ。当然。知った上で出てくるんだからわれわれとしてはアフィダビットベースですから。全て。

内山：だからそのアフィダビットベースってそこまで言うんなら、これ押し付けられた制度じゃないんですから、みなさんがこの制度でやります、って言うって企画入札してるわけですよ。だったらそのアフィダビットの信憑性を調査しないとだめですよ。

倉田：うちがこの制度でやりますって企画入札なんかしてません。

内山：つまり現地の人たちから情報もらって集めます。その情報収集して企画競争入札でとってる話ですよ。

倉田：そうです。

内山：そこの話です。そしたらその時に使うツールがアフィダビットだって言ったら、しかもそれがベースだと、それが全てだといきってるんですよ。その内容をちゃんと確認しないといけないってというのは当たり前のことじゃないですか。ただいってきたものが出て来たからフィリピン人信用して流してるってだけです。

倉田：基本的にはそうですね。探してるだけとはいいません。勿論チェックできるところはしています。ただ現実にそれを今アフィダビットの枚数だけでいけば2,000～3,000枚になるわけです。それを全部ねチェックして一人一人、当然やりますよ。

内山：やってないですよ。何のチェックも。

倉田：どういうことですか。

内山：つまり提出した人が確認されてないって言うてるわけですから。空援隊側からね。

倉田：空援隊側から確認されてない？

内山：今確認はされてるって言ってましたね。

倉田：はい。

内山：内容を一枚一枚チェックして。

倉田：はい。一枚一枚チェックしてるのは集まってきたご遺骨の横にくっついてくるわけですから、その時点で確認してますよ。我々は。

内山：その内容は真偽のほどは確認しようがないわけですね。

倉田：アフダビットだから真偽を確認する必要がないじゃないですか。

鎌田：つまり真偽を確認する前のアフダビットを書く行為自体が極めて杜撰だってそこ判るでしょ？

倉田：それ言われてるわけでしょ？ごちゃごちゃにされると話がおかしくなるんで、それは違います。

鎌田：ただそういうのがあるというのはご存知だったんだったら、その最後のチェックのともただ単に遺体とアフダビットがあるからOKっていうわけには多分もういかないわけですよ。その時点で。

倉田：言われることはわかりますよ。言われることはわかりますけども、現実には今のフィリピンの現場における現状っていうのはほんとに当初は何千のときっていうのはまだ言わば普通に我々が入って行って集めてくれるような現場がほとんどでした。それが今どんどん地域も広がっている中で入れない現場がすごい多くなってるんですね。当然現地の人たちの証言を信用するしかなくなってる。

それも現実です。それはゲリラの支配地域だったり、あるいは軍がゲリラとトンパチやって入れないとかそういうもの勿論普通にあるんです。それでもできる限りは入るわけですよ。当然現場確認に。それでもどうしても入れないところ、勿論手も足りませんから当然そういうとこ出てきます。そんな中で一部アフダビットが杜撰、そうなるってとこも地域としては出てくるかもしれません。それはこれからご指摘いただいた部分もチェックしてなおしていきなきゃいかなないと思いますよ、全体の構造としてアフダビットが全部杜撰だという話には絶対にならないです。

内山：もちろん全部とはいってないですよ。今おっしゃったようにゲリラが居る地域は入れないことも重々わかっています。でもそうじゃないところで起きてるんですね。ミンドロって町ですよ。持ってきた人は、ちょっと行ったところにもあるんで。そういうところのチェックも尽くされてないわけですよ。だから極論を言われるけど、こういうところがあるんです、言われるけど、そういうところもありますよ。そうじゃなくてちゃんと手がつくせるところでやってるんですか？っていう話ですけども、それはやれてない。それはお認めになりますか？

倉田：それはやれてないとは思いません。

内山：先ほどダブルチェック、トリプルチェックって一括されてましたけど、実際現場に入って話聞いてないですよ。だから本当に遺留品が出てきてもね、間違いないってところまでいかれてるってことでしょね。さきほど全てダブルチェックかけてるって言ってましたけど、仰ってること理論上はそうかもしれないけど現実はどうじゃないんですよ。

倉田：だからそうでない現場も中にはあるでしょう。それは認めますけどそれが全部みたいな言い方されるとそれは違います。

内山：だけどそれは全部自信を持って言えるようなところにかえしてこないと体制にあわせてですね、だから今やれる体制にあわせて

例えば年間500だったら500をちゃんと確認して返ってくるっていうスタイルにしなければ当然その周辺で起きてることですよ。数が増えて地域が増えて全部チェックできないって仰ってましたけどそれ全部チェックできる体制の中ですすめていくしかないんじゃないですか。65年経った今。

倉田：それはねえ、難しいと思いますけど、なんか方法が違うような気がします。本来国がやるべきことです。

鎌田：そうです。

倉田：勿論。もともとが。国が全て責任持ってやる事業です。それをね民間NPOがやるようなこっちゃないですよ。本来。勿論日本にはね遺族会とか戦友会とかいろいろやってこられた人がいっぱいいるわけじゃないですか。そういう人たちも出来なかったわけですよ。現実問題として。だからこれだけ残ってるわけですよ。国の事業としてもやらない。質問趣意書出したりしていろいろやってますよ。でも国が国の事業ですと言うだけじゃないですか。現実問題として。で現実どうするの？と、いったらやらないですよ。それ以上のことは何もない。だから外事室なんかかわいそうですよ。逆に。あれだけの人数でね、全世界なんとかしろ、って言われたってそりゃ出来るわけじゃないですよ。外事室に人にこれは直に同情しますよ。じゃどうすんのかって言ったら国が抜本的にシステム作ってやるしかないわけですよ。外交交渉ひとつ。だから実際問題としてフィリピンの去年の11月に行ってイフガオで焼骨やって持って帰るっていうので、もうとめられてもう大モメになったことがあるんです。その時でも最終的にその後なんとか持って帰りましたけどフィリピン外務省と日本の大使館と厚労省と二国間協議、ガイドライン協議始まって、その時にも私が入ってるわけですよ。現場に行っ。て。現地知ってる人間が言うしかないっていうんで、我々もわけのわからんガイドライン作られても困りますからね。だから当然入って、で話して、でガイドラインってどうするの、こうやって作る。じゃ火葬やらなきゃだめですよ、火葬場における火葬しかだめですよ、っていう話になっていったんです。そんなのひとつ取ってみて

も本来全部国がやることなんですよ。

鎌田：私はそう思う。

倉田：私もそう思います。民間でやることじゃないと思う。でもこれも我々がやらなかったら国がやりましたか？今までのまんまフェードアウトしていったんじゃないですか？私らはそこに疑問を呈したいと思います。国が本腰いれてやるんだ、確実に返ってくるんだという目処が立ちや私はいつでもやめますから。今みんなうちの連中みんな言ってることです。一番は空援隊の解散。

鎌田：どうしても数に拘るんですけどもフィリピン人の人たちの例えば盗難騒ぎが起きてるとか見るとですね、何千、何万っていう中には日本人ではない遺骨が増えてる、これからもっとどんどん既に今あるわけです。増えてくるなかでそうするとやっぱり受け止める側の遺族の人のですね、日本人の自分の父親なり兄なり弟なりの骨ではないのが混じっているってやっぱり絶対なっほしくない、そのためにはやっぱり数が少しぐらい減ったって誰も文句言わないですよ。空援隊の皆さん一生懸命やって来られたわけだから

倉田：別にどうでもいいんです。言われようと言われまいと。そんな問題じゃなくて我々としては何がしたいのかって、よく言われるんですよ。とりあえず今現場で掘るって言ったって10センチとか20センチなんです。実際、そんなところからボコボコ出てくる状態。で現実に私自身が行ってる現場で多分今までに500位ですよ。いまだれくらいになってるのか知りませんが。500位見てきて自分の目で確認して、これどう見ても塹壕やと。塹壕の場合多少掘りますけど、それでも50センチ掘ったら出てくる遺骨が・・・あがったものを見て、これフィリピン人だって言えないです。そんなのが各地にごろごろごろごろしてる状態、っていうのはまず無くしたい。

内山：だから、倉田さんが直接行ける所ね、あるいはちゃんとしたスタッフが直接行って保管して、遺留品も含めて、あるいは戦死と

照らし合わせても問題ないし、あの、現地の人の証言も得て、そういうのを持って帰ってこればいいじゃないですか。ちゃんとした手続きを経て。今、そういう風になってないですよ。ご自身が把握できていないところから、いっぱい入ってきちゃってるっていうのは。

倉田：いや、だから、把握していない地域から返ってきているのも事実ですし、そこが杜撰になっている部分があるっていうご指摘があるのも今理解しました。

内山：例えば先程、私どもは政府に渡しているだけだと言っただけで、例えばですね、明らかですね、島で私この戦闘に関しては、かなり調べましたけど、マニラの近辺の制海権もすべて取られてね、えっちらおっちら船漕いで行くようなところじゃないんですよ。このだからこの473っていう、ミンドロ島っていう所は、二個中隊が守備で行って全滅して、で、海軍が面子のために切り込み隊を送って110名、だからそれが全部戦死して、全部死んですね、全部骨で出てきても、450前後なんですよ。だから、そういうことを調べた上でないと

倉田：私等もそれは調べてますって。

内山：だから、それが1366、アフィダビット付けて送ってるだけですって、中々ちょっと無責任ですよ。

倉田：それ違いますって。

内山：さっき言っただじゃないですか。外事室が人数少なくて、専門家が付いて行ってチェックできる体制じゃないっていうこともよくよくわかってるじゃないですか。

倉田：はい。

内山：だから、空援隊がそうなんですって言ったら、彼らも持ってくる

んですよ。本来そうじゃいけないんだけど。

倉田：いや、だから

内山：そんなことは重々分かってますよね。

倉田：そら、それも分かった上で、実際ミンドロから、ミンドロに残ってる数っていうのは、最終誰にも分からないです。

内山：わかるんですよ。

倉田：いや、だから

内山：わかる。

倉田：それは、決めつけ。

内山：決めつけ。逆に言うと、倉田さんの決めつけですよ。

倉田：いや、それは分かんないですって。

内山：そんなことないんです。

倉田：島の間っていうのをね、自分で本当に普通に船漕いで渡ってみて下さい。

内山：うん、あ、いや、

倉田：普通に渡れますから。

内山：渡れない。

倉田：なんで渡れないんですか。

内山：だってね、もうあれですけど、私も戦後世代なんで偉そうなこと言えませんよ。制海空権全部取られてるんですよ。マニラも抑えられて。

倉田：うん。

内山：マニラからミンドロって言ったらあれですよ、マニラからもう島影が見えるような所ですよ。

倉田：ですよ。

内山：あり得ませんよ、何名も船で漕いで渡るってことをね。皆北部へ逃げて、そこでとにかく持久戦でやってた訳ですから。で、ミンドロの戦いってというのは、まだ泥沼になる前ですよ。

倉田：そうですね。

内山：イフガオはそうですね。ミンドロは違いますよ。

倉田：そうですね。だから

内山：だから、倉田さんが言ってるのは、はっきり絵空事で、つまりね、引き算なんですよ。50 数万、52 万の将兵から帰ってきている数を引いて、残りの数が合えば良いだろうという。このままやったら、きっと 51 万を超えますよ。もしかしたらね。

倉田：そんなにやりやすいですけどね。

内山：いや、やりやすいですよ、本当に日本の領土に帰ってくるなら。でも、

倉田：でも、51 万も出るとは思えないですけどね。

内山：そうじゃないじゃないですか。引き算でしか考えてないって

いうところに、非常に違和感を感じるんですよ。ちゃんと引き算するんだったら、きういうところもちゃんと整合性つけなければ、

倉田：その整合性

内山：その差額の数、フィリピン人のものを持って来てるって考えても、言われてもそういうことは否定できないですよ、内訳見ると。そうすると、9 の 1 じゃないじゃないですか。

倉田：だから、そういう可能性っていうのが、まったくあるのかないのかっていうのはね、私はその当時生きてた訳じゃないですから、わかりません。ただ、その守備隊の数もしくは日本軍がそこに渡った数以上の人間の動きがあったことは確かです。

内山：その時は、記録が残ってるんですよ。

倉田：いや、だから、

内山：つまり、ぐじゃぐじゃになっちゃうってというのは、もう敗走敗走を重ねてからですよ。

倉田：はあ。

内山：はあ、じゃないんですよ。

倉田：だから

内山：そういうことやんなきゃ。そしたら説明責任って言えないですよ。本当稚拙ですよ。

倉田：まあまあ、稚拙でも何でも良いです。そんなものはね、そこを議論する気は、私等にはないです。

内山：そしたら倉田さん、どうやってこの説明責任を果たされるつ

もりなんだ。

倉田：説明責任も何もありません。私等は、最初に説明した通り、戦史を無視してやっています。現地のフィリピン人の人たちを信用してやっています。だから、そこは明確に立場が違います。だから、当然ミンドロで何人の方が無くなっているということ自体は、当然調べてますし、我々もそうしています。その上で、それでもあると彼らが言っている以上、今仮にミンドロで出して来てる、ご遺骨を持ってきてる連中ってというのは、半分以上が軍です。だから、その軍に、どこから持ってきたのっていうて、司令官までここから持って来たよ、日本人の骨ですよってアフィダビットを書いて持って来られて、で、それを今度は受け取らない方法論はどこにあるんですか。

鎌田：そこは、もうチェックできないからじゃないですか。

倉田：いや、現場まで行ってですよ。行って確認して、アフィダビット書くのは軍の司令官なんですよ。で、軍の司令官が書いて、で、兵士が書いて、それを我々が確認して、それを今度はどうやって拒否するんですか。その場で国軍と戦争するんですか。こんなもんおかしいじゃねーかって言って。そういうってということが現実なんです。

鎌田：だから、その現実の背景には、さっきも言いましたけども、さっきも言いましたけども、これね、多分ね、1300 有り得ないですよ。有り得ないが、どうしてこの数が集まるかっていうと、日本兵の遺骨を見つけたら、3000 から 6500 ペソ払うってそういう構造ですよ。

倉田：それが、うちは払うって言ってないですって。

鎌田：言ってる。そういう風に噂が広まってる。だから、逮捕者まで出てくる訳です。

倉田：実際、6500 ペソなんて払ったことないです。

鎌田：嘘でしょうね。本人がそういう風に言ってる。

倉田：そんなもん払ってたら、うちの予算ってどんだけ要るんですか、一体。

内山：一体 500 って考えたら、6500 になるじゃないですか。あ、一体 500 ペソになると考えるとね、一個持って行くと安置されて、500 ペソ貰えるっていう人がいるんです。

倉田：一体 500？

内山：そう。

鎌田：一袋一袋。

内山：違う一柱。

鎌田：そう一柱、一柱。

内山：そう一体 500 っていう風に貰って、掛ける例えば 50 体だったら、500 掛ける 50 でペソを貰ってるっていう人が何人もいるわけですね。そう考えると 6500 って、起こり得ますよね。単純に考えて 13 体。

倉田：一袋？

内山：それが一袋に入っているなら、一袋。

倉田：まあまあ、

内山：具体的な額は良いとして、お金になりますよってことは付いてくる。

鎌田：お金の額は別として、あるいは数百ペソかも知れませんが、これも

倉田：払ってるのは確かです。

鎌田：つまり、そういう払い方をすれば、つまり、こういう不自然な数が集まるってことが当然起きてくるじゃないですか。ね、もし仮にこのやり方を採ってやるのであれば、そこは最終的に、チェックの所を、より、よりこ厳しくやるしか、やっぱりないと思うんですよ。そうしないと、やっぱりフィリピンの人たちの思っているのは、絶対そこまで思いを馳せないといけないと思うんですよ。遺族の人たちの思い。で、ここまでやったんだったら、っていう所まで、本当にやられているのかどうかに対して、疑問を持たざるを得ない。

倉田：まあ、そういうことに関しては、完全であるとは私も申し上げられませんから、だから当然不備もあるでしょう。だから、そこは自分たちでも反省しなきゃいけない所もあると思いますけど、でも基本的に、今のやり方っていうのをベースにして、やっていく以外、方法論は現実的に持たないです。だから、それがだめっていうことなら、逆に私等が止めれば良い話ですから。別に我々は、無理やりやらしてくれて言ってる訳でもないですし、だから国がやるのかやらないのかっていう、

鎌田：これはもう国の責任ですよ。

倉田：で、国がやらないんなら、私等がやろうって言ってやるだけですから。

内山：倉田さんさっき司令官の話、これミンドロの話、自分たちはベースを持ってる訳ですよ。数はこれしか出ないという前提はね。だから、これしか出ないから現場へ連れて行って言ってくれて、軍が連れて行ってくれるなら強いじゃないですか。

倉田：当然、行ってますよ。

内山：行ってるんですか。当然遺留品とかも出てきますか。

倉田：出てきます。

⑦内山：それ全部で幾つですか。

倉田：どこが全部っていう数か今は把握してないです。

内山：そういうの一個一個全部つぶしてってやるべきですよ。数が超えちゃってるんだから。戦史を無視するところから始めてるんだから、っていうのはちょっと違うじゃないですか。

倉田：例えばね今ミンドロに関してはそうやって言われるのも十分私でも理解してますし、当然もともと行ってたって言われてる戦史で言われてる数より多いわけですから。それが他の理由で渡ってきたのかどうかそれも私は事実確認できないですし、分かりません。だから今回今までうちのミンドロで上げてきたものに関してもう一回バランガイに最終照会かけたんです。何体分何体分、っていうのまで確認してもらった上で証明を全部バランガイから・・・つきでもらってきました。

内山：嘘だ。いつやったんですか。断定されるんだったら倉田さんちゃんとベースがあって言ってるんじゃないか。

倉田：当然。

内山：それは当然持ってきたひと、一人一人確認してるってことですよね。

倉田：勿論。それは全部バランガイに委託してバランガイから証明をもらってるんです。

内山：バランガイが確認しないんですよ。

倉田：そこは言い出したら

内山：言い出さなきゃだめですよ。

倉田：どうしようもないんですって。

内山：そこまでやんなきゃ駄目ですよ。65年経ってるんだから。

倉田：65年経ってるんだからって、私の責任みたいに

内山：あなたの責任でしょ。あなたが責任持ってやってんだから。

倉田：何が責任なのかよくわかりませんが。

内山：その紙一枚。

倉田：紙一枚ですよ。

内山：すばらしいですねえ。

.....

鎌田：これ一体につき一枚ってことですか。

倉田：いえ、これです、書いてるでしょ。(書類を見せる)

鎌田：これですか。

倉田：はい。このバランガイから

鎌田：113体。

倉田：はい。全部日本人であるという証明。

内山：疑惑があって、それが現地の人たちが作ったものをベースに疑惑があるんだったら、それを確認さしても意味が無くないですか？現地の人に確認してもらってるんですよ、また。

倉田：いやだからこれは、確実にこれから訴訟になりますよと。言う事を了承して頂いたうえで、バランガイキャプテンにこれは求めたものです。だから既にこれ持ってきて、これ2009ですよねだから、我々が収集したのは、それについての証明を全部貰ってますから、これからこれが訴訟になって、で、日本人の骨であるのか無いのかというところがフィリピンの裁判所で多分決着がつくでしょう。おそらく。

内山：誰が訴訟費用を起こす、出す、誰が起こすんですか？

倉田：うちがやりますよ。

内山：〇〇ね。

倉田：はい。それがもし違うのであれば。

内山：それ、違うんであれのはどういう風に確認するんですか？違うんであれば、と仰いましたが、違うとはどうやって確認するんですか？

倉田：いやだから、我々は信用してますから。だからこれが違うという証明があるいは出てきたときに、それに対抗して訴訟するしかないじゃないですか。

内山：倉田さんちょっとおかしくないですか。

倉田：何がおかしいんですか？

内山：つまり、400ちょいしか出るはずない所から1300以上出て本当かと言って提出した人たちに確認をして、この紙を現地の人たちから提出させて、それで証明だっていう。一応ジャーナリストって仰ってましたよね。

倉田：だから

内山：そういう追徴取材した時にこういう証言でそれで納得されませんか？

倉田：だから、ちょっと落ち着いて物考えて下さいよ。

内山：いや、僕は落ち着けないですよ、これは、僕の理屈。

倉田：そうなんですか？

内山：だって提出した人たちにもう一回提出させてるんですよ。それを確認って言ってるんですか。

倉田：提出した人達とは違いますから。

内山：ああそうですか。

倉田：当然これには別なアフィダビッドが出てるわけですよ。それはバランガイキャプテンが出してるものではないです。

内山：だから(失笑)いや、ごめんなさい。バランガイキャプテンって素人じゃないですか。これに関してね。村の自治会長さんですよ。

倉田：それは認識が違うんじゃないですか？村の自治会長が司法権を持っていますか？

内山：いやあ、まあ、勿論そう。トラブルの中でね。

倉田：それはね、認識の誤りですよ。

内山：その時にひとつひとつしっかりチェックしてるわけでは、

倉田：それ、返して下さい。テキトウな書類じゃないんで。

内山：これ 27 日って我々が入ってからなんですよ。これいつあれ、作るように命じたんですか？

倉田：作るように命じた？

内山：調査するように、依頼したのはいつですか？

倉田：依頼したのっていつやったっけ？9 日やったっけ？

鳥羽：そんなもんちやいますか、9 日…

倉田：やな、確か。

鳥羽：そうですね。

内山：バランガイに依頼したんですね。すべてのバランガイですよ。ね。

倉田：はい、そうです。もう一遍きちんと再調査しろと。

内山：その調査はご自身たちがやるんじゃないかって、村の人たちにお願いしてるんですよ。

倉田：うちのスタッフが。

内山：ああその

倉田：ミンドロの。

内山：間に入ってる人ですよ。

倉田：いやうちのスタッフです。はい。

鎌田：倉田さん、あのミンドロの件なんですけど、あの要するにそのまゝ数がおかしいという事で、そのミンドロにいらっしやるスタッフの人に我々取材したんですけども。えーと…

倉田：うちのスタッフですか？

鎌田：うん、そうですね。ガリヤーノさん。

内山：ジュンジュン・ガリヤーノ

鎌田：ガリヤーノ

倉田：ガリヤーノ。ジュンジュンですか？

鎌田：で、以前にあの、変なのが入っても最終的には鑑定人の人に鑑定かけるからそこであの、違うのははじかれる筈だ、という風に仰ってるんですよ。

倉田：ジュンジュンがね。はい。

鎌田：はい。でその鑑定なんですけど、

倉田：いや、鑑定はしてないですよ。

鎌田：それはどういう意味なんですか。僕はその、スタッフの人が鑑定・鑑定って仰ってたんで。

倉田：ああ、それはジュンジュンが実際に集めてきたものに関してはミンドロ支局でまず全部キープされます。うん、第一段階は。で、ミンドロ支局に全部キープされたものを、ま、それ、時と場合によるんですけど、あの、日本から我々が行った時に、博物館員一緒に行ってそこでチェックをするっていうこともありますし。

鎌田：博物館員でフェルメ氏の事ですか。

倉田：とは限りませんが、博物館の人間ですよ。

内山：それっていうのはどういう事ですか？数？

倉田：で、アフィダビッドと共に。カウントは厚生労働省が着いてきますから。

鎌田：カウントっていう事は数ですよ。

倉田：そうです。最初個体数識別っていうのは何体分あるのか、必ず博物館員と厚生労働省が同席なんですよ。

鎌田：つまりそれを言ってるんじゃないかって、その前提です。

倉田：はいはいはい。

鎌田：前提です。

倉田：わかってます。

鎌田：つまり日本人かフィリピン人かわからないのが、蓋然性がこの数だけ見ると、勿論、戦史が間違ってるという前提に立たれるとどうしようもないんでしょうけど、まあ一般の人は戦史に対して、やっぱりある程度の権威、つまり、正しいだろうなと思いますから。で、それと違う数が出てくるっていうのは不自然ですから。で、それどうするのかと聞くと空援隊の人は鑑定にかけるという風に

仰られたから、つまり、数をかける、数をカウントするのではなくて、識別をします。という風に私共は理解しました。そこで、あの、その、博物館の人ですか、フェルメさんという人の所に取材に行ったんですけども。そんなの出来るわけがない。

倉田：でしょ？だから鑑定なんてしてないですよ。カウントしてるだけです。

鎌田：それ、そうするとこの空援隊の人の鑑定という、鑑定して無いという事ですねそうすると。

倉田：鑑定してないですね。

鎌田：最終チェックはそこもなってないと言う事ですね。

倉田：鑑定はしてないです。誰も。

内山：それもそのミンドロのね、そのジュンジュンさんはそんなに低く無い人ですよ。上の方の人ですよ。ミンドロの中で骨を集めると言う構図の中では。

倉田：ミンドロに3人しかいないスタッフのうちの一人ですね。

内山：その人の理解は間違いなく、自分の所をスルーして行っても専門家が鑑定してるから、俺たちのシステムってのは間違い無いんだって言うてる。つまりそういう事はそういう説明をしてるんですよ。

鎌田：数じゃない、つまり数の事を言ってるんじゃないんですよ。こっちだってそんな、あの全部日本人だったら数だったらそんな鑑定する必要ないってわかりますから。数の鑑定は必要ないって事だけであって。で、

倉田：数の鑑定は必要ない？

鎌田：いや、数はだって、さっき仰ったでしょ。日本人のね、厚労省の人も含めて。あのその数の事を言ってるのではなくて、つまり想定してないことかもしれないけれども、日本人じゃない骨が混じるような事が起きた時には、鑑定にかけるから、という風に言われたので、鑑定するというふうに仰ってる人の所に行ったら

倉田：鑑定なんかしてないです。

内山：その理解ってどうやって生まれるんですかね、結構ちゃんとしたスタッフ。

倉田：そう言ったことはわからないですね。

内山：少なくとも意思疎通、そういう意味では取れてないっていう事ですよ。情報の共有も。

倉田：情報の共有とかそういうのは基本的いきちつうちのスタッフに関してはしてますよ。だからジュンジュンがなぜそんなことを言ってるのかがわからないです。

内山：ま、忘れてるのか、言ってるので。そこは情報がずれてるとしか思えないですけど。

倉田：そうですね。まあ彼らが無理解なのか我々の説明不足なのかまあそれはチェックしないとイケないですね。

鎌田：倉田さん、あの、まず最初に宣誓供述書っていうのがあって勿論ここがディテールが入んでいれば勿論蓋然性が高いと勿論思うんですけども、ただ、アメリカのケースなんかの場合だと勿論その骨の専門家とかいるわけですから、やはり最終的に科学的な目というのでやっぱりダブルチェックっていうのは本来であれば、やっぱりやった方がより良いんじゃないかって気はするんですよ。と

ころが鑑定っていうのはそもそも無いと。でそうすると今のお話だと本当に宣誓供述書一本って事になりますね。

倉田：そうですね。

鎌田：ですよ。

倉田：はい。

鎌田：でもどう見ても宣誓供述書が杜撰だというのは、つまり不十分だと、杜撰だという言い方が失礼であれば不十分であるというのはフィリピンの人たちの行動を見ればわかりますからね。そうするとこれ本当に一本でいいのかっていう。

倉田：まあ方法論は考えなきゃいけない可能性はあります。ただ現実問題として、今例えばうちが委託費としてもらって委託事業をやってます。こんな全然足らんですよ、正直言って。去年の場合だとうちの年間予算の4分の1、今年も多分3分の1以下。それ以外は全部うちの会員さんの会費とか寄付とかを集めてやってるわけですね。で、その人たちがみんな一体でも多く還そうと言う意思でやっている以上、我々はね、できればきちっと還したい。早く還したいっていう思いでやっていきますから、必然的に話は拡大方向に行きます。これを縮小方向にいてより精度を高めて、でその精度っていうのが日本人が納得するような精度にしてやって行こうとした場合、それとてもやらないけど、こんな費用じゃできない。

鎌田：そりゃもう国にやらせるんですよ。

倉田：だから、国にやらせるために散々やってるんですよ。でも彼らは聞かないわけですよ。

鎌田：だから今空援隊がやってきたことはこれまで国がやってきた

事の完全にカウンターパートになってるわけですから、で、これが今、もしかしたら不十分な事が起きてるんだったら、そこはちゃんと国が、これは国家の責任ですよ。

倉田：そら元々そうですって。元々国家の責任なんですよ、こんなもん。やらなかった国家の責任だし、それを放置してきた国民やマスコミの責任やないですか、これ。

鎌田：そうそう。

倉田：そうでしょ。なんでそんなことが今になって国家がやらないのやるのって散々やってますよ、我々は。うん。やってますけど、一向に国は動かない。で、やるかと言ったら国の責任です、国家事業ですってお題目だけでしょう？だから今我々が国につきつけようとしているのは、国家の事業っていう看板を外せて言ってるんですよ。そしたらもう完全に民間でやるからって。だからね、その辺がねなんか全然温度差が違いすぎて。

鎌田：私はその個人的な思いですけど、倉田さんの思っているのはね、素晴らしいと思うんですよ。素晴らしいと思うんだけどやっぱりね、相当ね、不十分な点がそのままの形でやってくと、これどんどんどんどん出てきますよ。倉田さんの思いと違うような数字になってる。つまりどう考えてもこの数字ね違和感しか持てないんですよ。あまりに多すぎるから。だからそこはある程度のところにしてチェックに時間をかけると。そのかわりこの事業に対しては国がやらないことを俺らがやってるんだから、ちゃんともっと金出せっていうふうに正当にやっていくべきだと僕は思いますよ。

倉田：正当にやってきて今なんですよ。とにかく国相手には精一杯交渉しました。出来る限りのことは全部やりました。でもどうにもならない。

内山：倉田さん、本当、僕ら上げ足取るつもりはまったくないし、大事なことだし、今仰ったようにマスコミも含めて一要員としても

う無関心のところあったって改めてもうこの件に関わるようになって反省してるとこ大きいんですけど。

鎌田：私もそうですよ。

内山：その倉田さんが言ってることに説得力があればあるほどね、そのベースになるべきことしっかりやってれば、それはすごい大きい力持つ話になるのに、さっきもちらっとご自身が仰ってたけど、そのベースが不十分だってことは言われてるところありますね。確認できてないところが。それは確認できる範囲内を尽くしてそれでいってかないといけないうんじや。

倉田：それは当然これからもう一回現場のチェックをしておいて、でそういう指摘を受けないように出来る限り正確に当然できるようにしようと思いますよ。

内山：で、その時にさっき書類を引きあいに出すっていうわけではないんですけど、もう一回俺らが確認に行ってもらってサティフィケーション出してるんだって言うんでは同じ繰り返しですよ、ね。

倉田：いや、だからね。

内山：そこを改めないよ

倉田：そうじゃなくって我々そのね、アフダビットベースで動く以上ね。フィリピン国内法ベースで動かないとどうしようもないんですよ。すって。

内山：そこを責任逃れしちゃう駄目ですよ。

倉田：逃れてるんじゃないから。だからフィリピンの国内法に基づかないでフィリピンで活動できないんですよ。実際には。

内山：それはアフダビット集めるとかそういうことですよ、ね。で、

実際遺骨を移すのは当然国内法ですよ。

倉田：遺骨にさわること自体国内法です。

内山：もちろんそう。

倉田：それを国内法無視してやってきたんです。日本の遺骨収集は、今まで。だからね、こうやって今言われてます。確かにね。言われてますけど戦前は遺骨収集やってないでしょうから分からないですが、戦後遺骨収集やり始めた時に何の鑑定もカウントも無しに動物の骨まで混じって皆持って帰ってるんですよ。それ言い出すとね全部千鳥ヶ淵にあるのをひっぱりだして、っていう話になっちゃうわけです。結果。だからどこまでを容認してどこで線引くのかっていうところだけの問題だと思いますから、その線が杜撰だと言われればそれ引きなおさなければいけないと思います。ただその方法論を今変えようとは思わないです。

内山：そこまで認識してるんだったらね、倉田さん正直悪い言い方するけど、こんなこと起きるのは当然わかってやってますよね。

倉田：当然わかってやってます。わかってやってますよ。

内山：例えば違うものが入ってくる。

倉田：違うものはいってくるっていうのは

内山：…

倉田：証言が嘘をベースに出てるだろうというのも予想してます。だからそれはこれから全部告発告訴していくことになるでしょう。

内山：でもそれが嘘かどうか確認する術もないわけですよ、ね。現状だと。

倉田：いやだから、いちいちこちらから確認しに行こうとは思わないです。

内山：だからこの体制組んだ時にこういうことが起こりうることも当然想定されてなさってるって考えていいんですね。

倉田：はい。そこは確信犯です。

内山：確信犯。

倉田：はい。だからでも敢えてこうしてやって来たおかげでNHKさんこうして取材に来てくれるようになったじゃないですか。ありがたい話だと思ってますよ、私は。

内山：笑っていうところじゃないですよ、これは。

倉田：いや、笑っていいじゃないです。

鎌田：相手がいる話ですよ。

倉田：現実問題ですよ。

内山：動物の骨持ってきてわらってるのはいいですけど、

鎌田：そこんとこなんですよ。

倉田：そこは重々わかっています。

鎌田：動物の骨ならね、と思うんですよ。やっぱりその倉田さんがそう思ってるとは思わないけど、つまりフィリピン人の骨だったらいいや、っていうところに

倉田：思わないですよ、全然。

鎌田：差別的なね、意識あるいはかつて戦争おこした時の日本のアジアに対する見方とね、共通するようなものももしかしたらあるんじゃないかって、自戒をこめて私もいつてるんですよ。

倉田：それは全く逆やと思ってます。だから我々フィリピン入った時に一番最初に感じたことって言うのは日本人がフィリピン人信用しないんだって言うことやったんですよ。政府派遣団来ますよね。当然フィリピン人が多数協力します。穴掘りのときに人夫が出てきてやるわけですよ。でもそれこそ取材してましたから、ほんとにね現場でカメラほかして帰ったことあるんですよ。あまりに怒って。何やってたのかっていうとね、日本人がずらずらと来て、みんなこうやって現場でね見物してるわけですよ。その横でフィリピン人が一生懸命ね、掘ってるわけです。何も出てこない。それを現場もなんにも知らない日本人が指揮して。ここ掘れあそこ掘れ。三日も四日も五日も続けてく暑中やってるわけです。昼飯の時間になって自分たちはちゃんと屋根と机があるところに立派な料理持ってきて、飯食って、食い残しを、外にいるフィリピン人には、これ食えって。であいつらは、「ほら見てみるあいつら、手で食ってるよ」って笑ってるわけですよ、こんなが政府の

鎌田：役人が

倉田：そうです。

鎌田：くそですね。

倉田：そうです。くそもいいとこですよ。で、おまけに最後に焼骨、当時は薪組んでやってるんですけどね、その薪の上に日の丸かけて一緒に焼くわけですよ。日の丸焚き付けに使って。へえ〜。これが国のやることですか？その怒りの原点は絶対忘れないですよ。誰に言ったって誰も相手にしない。その映像見せても誰もそれを理解しようとしません。あ、そうですか。じゃあしょうがないですよ。自分たちとしての自分たちなりの戦いを始めた、っていうのが今や思いますし、それが杜撰になってきて、そういう部分が出てきてるん

だとすりゃ、そりゃすなおに反省しなきゃいけないし、直さなきゃいけないと思います。でもそれを改めてどうしようっていう気は全くありません。

内山：倉田さんあれですか、逆に、例えばですけど、じゃあアメリカが日本と戦争してね、本土で。アメリカ兵の骨を持って帰らなきゃいけないっていう時に、自分のご家族の骨を盗難まじりでね、持って帰られて。たとえ一体でも 999 対 1 体でも許せますか、それは。

倉田：しょうがないでしょう。状況によりますけどね、勿論。だからその遺骨に対する考え方、感情、日本人とフィリピン人は全然違います。そういう部分のそれは影響は大きいと思います。日本人なら、それこそ、そこで命かけて守るんだっていうような気持ちを皆さんお持ちであると思うし、私もそうだと思いますよ。でもフィリピン人そこまで持つてるかと言うと一部地域の、まあイフガオなんかはそうなんですけどね、彼らのご先祖に対する、まあ少数民族が多いんで、ケーススタディがあまりにね多すぎて問題多いですけど。イフガオ族とかマンギャン族とかあの辺の連中はものすごく先祖の骨を大事にするわけですよ。日本人とほとんど変わらない感じですよ。だからイフガオとかミンドロとか、まあ私はもともとセブから入ったからセブとかいうところから始めていったんですよ。だからその思いっていうのが強いがゆえに逆に私はイフガオの人たち信用したし、まあミンドロの連中も信用したし、セブの連中も信用したし。だから一番最初にセブに事務所開き、で、イフガオっていう風に関わっていったんですよ。だから現地の人協力なかったらとてもやないけど出来ないです。コンタクトパーソンに当たることすらできないです。それはもうね内山さん行ったからよくわかんと思いますけど。日本人だけで行って何か出来るかって言ったら全く出来ない国ですよ、あの国は。

内山：倉田さんさっき、確信犯っていう風に仰いましたけど、その日本兵の時に持って来たら、労賃として払うっていうこの考え方も、ある意味他の方も確信犯的なものですか。

倉田：どういう意味ですか。

内山：つまり、それを持ってきた、アフィダビットを付けてね。持ってきた限りは、労賃を払う。

倉田：労賃は払います、もちろん。

内山：まあ、当たり前ですけど、あの何だ、どこで集めたものかわかんない、アフィダビットののないものについては、払わないですよ、ね。

倉田：払わないです。

内山：これはある意味、それも確信犯的なものです。

倉田：何の確信犯なんですか。

内山：つまり、お金をもらえるためには、日本兵であるという事を証明しなければいけないんですよ、ね。

倉田：アフィダビットを付けてってということですね、はい。

内山：それは、つまり、一つアフィダビットの中に、例えば嘘を書いてしまっただけ、分かんないことを分かったように書いてしまうっていうインセンティブになりませんか。

倉田：まあ、それと実際自分が捕まって、刑務所に行くこととインセンティブのどちらの方が大きいかなと思うんですけど。

内山：だから、逮捕者も出てしまうかも知れないっていうことは

倉田：考えにくいですね。

内山：だけど実際に起きてますよね。

倉田：それ、起きてるんですか。

内山：起きてるんじゃないんですか。

倉田：あまり、そこは起きているというつもりはないです。

鎌田：あの、起きているというのは、つまり空援隊の事業があるから、墓取って盗難をしようと、そして実際に盗難した人がいるということ間違いないですよ、ね。

倉田：それが事実だとすれば。

鎌田：そうですね。だから、空援隊の事業が、そういう一般の不届き者のインセンティブになっているっていうのは、

倉田：そういう話が噂になっているっていう話も当然よく知ってますし、よく言われます。

鎌田：だから、今やってらっしゃる、そういう、その、例えば労賃を払うとか、で宣誓供述書一本でやるとか、つまり、今の空援隊がやってらっしゃるこの事業自体に内在する所があるんじゃないか、という所なんですよ、ね。

倉田：まあそんな問題がないとは思わないです。もちろん、改善の余地はあると思ってますし、これから改善しなきゃいけないという所もいっぱいあると思います。だから、そのためには、まず、今やろうとしているのは、とりあえずその無許可でうろろろする奴の排除ですよ、ね。

鎌田：ああ。それは私もちょっとよくわからないですけども。

倉田：だから、それに関しては、フィリピンのナショナルポリスと話を始めて、博物館も入れて、協議して。で、逮捕者が多分近々出

ると思います。それが日本人でなければいいなと私は素直に思ってるんですけど。

鎌田：元空援隊とかそんなんじゃないようにして下さいよ。

倉田：そらあね、私等も自分たちで行って元空援隊とか言われても困りますからね。うちのスタッフで、いままで首切ったのたった一人なんですよ。

鎌田：それはなんで？。

倉田：おかしなものを持ってくるからです。

鎌田：ああ。

倉田：それはミンドロのスタッフです。そいつは、去年の6月かな。首切ってますから。あまりにおかしな骨持ってくるんで、お前それはすぐ駄目と。

内山：もし、横から持ってきたのか、あるいはまったく違う所から持ってきたものだということが明らかになったときに、今それを返す、返すことができる状態になってるんでしょうか。つまり、どこから来た骨が、どこに納められているというのは、判別できるんでしょうか。

倉田：なってますよ。

内山：わかってる。

倉田：うん。

内山：ただ

倉田：厚労省の仮安置所に入ってる分に関してもアフィダビットご

とになっているはずですが。それは厚労省の管理なんで私はわかりません。

内山：でも、あれですよね。袋に、例えば、セブ 150 だと。

倉田：ん？セブ？

内山：大まかな地域と数ぐらいのものを、まずは、ボランティアの人たち含めて、カウントするの手伝ってね、それを燃やしてるってことですよね。

倉田：違います。

内山：ああ、そうですか。

倉田：今はアフィダビットごとです。

内山：今は。じゃあ、前まではどうですか。私は、遺骨収集に参加した方からたくさん聞いてますが、そんなにしっかりやってるケースではないですね。

倉田：今まではね、あの、あれなんです、焼骨っていうのが野焼やったんです。火葬をやる前は。

内山：野焼、そうですね。

倉田：そら戦後やってきた方式をそのまま踏襲して厚労省の言う通りに我々ずっとやってきたんです。だから、その方式は、昔からずっとそうなんです。我々変えたいって言っても、変えさせてもらえない、そのまま火葬せずに持って帰っても良いじゃないっていう話をしても駄目。こらしょうがないねと。

内山：じゃあ、今、あれなんです。例えば誰々さんが骨を持って行ったけど、実際は違ったと。それは焼いてしまったけど、返しま

しょうと言えば返せるんですね。

倉田：返せるでしょうね。

鎌田・内山：(こっちはOKです)

倉田：こんなもので？

鎌田：ありがとうございます。

=インタビュー終了=

鎌田：すいません、長々と拝聴して。いやあ。

倉田：とんでもない。いやもう大変ですよ。本当に、やってたら。

鎌田：やっぱりね、何万っていうねことになるってね。

倉田：なりますよ、当然。

鎌田：対応できなくなるって。

倉田：当然なるでしょうね。これ。だから、そうなったときに、国が対応するのかっていうことをね、私は国に聞きたいんですよ。

鎌田：僕ね、あの一、申し訳ないんだけど、やっぱり杜撰なところを僕は今のお話の中でもお認めになっている所っていうのは。

倉田：一部それはあるだろうと正直思いますよ。

鎌田：そりゃね、僕ら報道後押しします。ただ、僕はやっぱり最終的には、国だと思っているんですよ。何回も繰り返しますが、国家の責任で戦争を始めたわけだから、

倉田：間違いなく、そうです。

鎌田：終わった後のね、遺骨収集っていうのも国家の責任でやらないとだめじゃないですか。何が国家ですか。

倉田：当たり前ですよ。でもね、そういう国家が実際に機能してないんですよ。

鎌田：いや、だから、機能させなきゃ駄目なんですよ。

倉田：そのために、一生懸命ここまでやってきたんですよ。

鎌田：あの、方向性は違うかも知れませんが、同じようにまた明日また怒りにいくつもりなんで。

内山：だから、倉田さん、ほんと、ベースがどこに出しても動じるもんないっていうんだったら、それほど強いことはないんだから、なんでそれを担保されないんだろうってすごい思うんですよ。

倉田：いやそれはね、実際問題、あの、完璧にやることって別にそんなに難しい事じゃないです、正直言って。ただ、それでは、誰も続けてくれないじゃないですか。

鎌田：そこはね、現実と理念との挟間って絶対あると思うし、完璧に絶対付いてこない、もちろん金銭的にも難しいんですよ。ただ、何となく、こう多くの国民なり、例えば、こないだも文藝春秋に書かれないような形でね、つまり、この辺りであれば、まあ、文句はないだろうっていうところって、僕は、絶対あると思うんですよ。

倉田：まあ、それも模索しないといけないですよ。

鎌田：〇〇〇だと思うんですよ。

倉田：ま、でもね、現実問題ね、鎌田さん、我々何やってもね、報

道になんか乗ったことないんです。それが現実です。だから、多くの国民は知らないんです。だから、悪名は無名に勝るんです。

鎌田：今回の番組の目的は、空援隊のやっていることを糾弾するっていうのが目的ではなくて、遺骨収集って本当にいいのこれっていう問いかけ。

倉田：本当に問い掛けてほしいです、私は、どこまでも。だから、本当にね、内山さんなんか20日くらい向こうに行ってたわけですよ。どのくらい、適当ないい加減な国かってことはよくよくご存知のはずですよ。そんなことは私等もよくよく分かってます。その上で、やる方法があるとしたら、フィリピンの国内法をベースでやるしか方法はなかったんです。

内山：うん、法律に則ってらっしゃってるのはよくわかるんですけど、じゃあ例えばそれこそ日本円で言えば、100円とか300円とかそのぐらいのことで、結構色んなものが何でも動いてしまうことがあるじゃないですか。そういう国情を知ってる訳だし、現地語をちゃんとしゃべれる人もいる訳ですから、分かっているはずだと思っただけですよ、何が起るのか。

倉田：もちろん、分かっています。分かっても、んじゃあ、手をこまねいて見ているのかって、そういう訳にはいかない。

内山：それ、もう一つ、やっぱり作らないと。

倉田：で、何かね、作って、やって、完璧なものにして、どんどんどんどん収集していけば、じゃあ、いいのかってなると、それは今度は予算との兼ね合いになる。

内山：でも、そっちの問題の方が大事っていうか、それはそうなったら解決すればよくて、そこに至らないから、何でもかんでもって、これは本当、だって一番日本の考え方の…

倉田：ちやいます、ちやいます。予算の問題っていうのは、やろうとしたら付いてくるから出来ないんですよ。

内山：今、だから、今あるいは行われてるっていうのは、あまりにも日本側の視点しかない事に、違和感があるんですよ。

倉田：うーん、まあ、それはね、違和感って言われるとちょっと私にはどうしようもないんですけど。

内山：いや、だから逆の立場を考えればって思う訳ですよ。それは立ち止まらなきゃいけないところで、そもそも60何年も経って、何十万も残っているって事自体国の無作為だし、国民の無関心だし、そこは寄って、立たなきゃいけないんだけど、だからと言って、何でもかんでも集まって来るのを、ノーチェックで、数だけ増やせばいいってことじゃ、絶対ないのよ。

倉田：そら、もちろんそうです。

内山：そこは倉田さん、重々わかって、ご本人が確信あってって仰ってたから安心しましたが、これ本当にピュアにね、そんな事起るわけないと言われるかと。本当にこれ起こってますしね。

倉田：(笑)。起こってるっていうのを今言われて、我々は、それじゃあどうしようという対処をしていだけで、で、現実問題、次からはんじゃどう起らないようにするのか。だから、止めるっていう話にはならないです。だから、国が本腰入れてやるって言うてくれりゃあね、本当にやってくれりゃあ、我々は明日でも、止めます。今年、一昨日帰って来て12回目ですよ、フィリピン。一銭の給料も貰わずに。やってられませんよ、実際。行きたくて行ってるなんて、一回も行っていないですから。何一つ楽しいことがある訳じゃないね。何しに行くんですかって、周りからはボロカスに言われ、自分の仕事ほったらかしてまで、なんでこんなことしなきゃいけない。皆に言われるんです。裏はなんや、バックは何がいるんや、そんな話にはしかならない。何もありません、そんなもん。あのとき、最初に

フィリピンで、自分がカメラ片手に聞いた言葉に、一言も返せなかった。あれが原点ですよ。あれに関しては、もう一生忘れられないですね。

内山：〇〇〇その思いも分かるんで、だからこそ

倉田：〇〇〇なんて、正直言ってどうでもいいんです。もっと関心持って〇〇。ただ、私が一番懸念するのは、そういう問題を巷に知る人が出ますよね。じゃあ、俺がフィリピン行ってやらあってという奴が出てくる訳ですよ。非常に危険です。

内山、鎌田：すいません、お時間いただきまして、ありがとうございました。

倉田：ありがとうございます。とんでもない。

以下雑談。